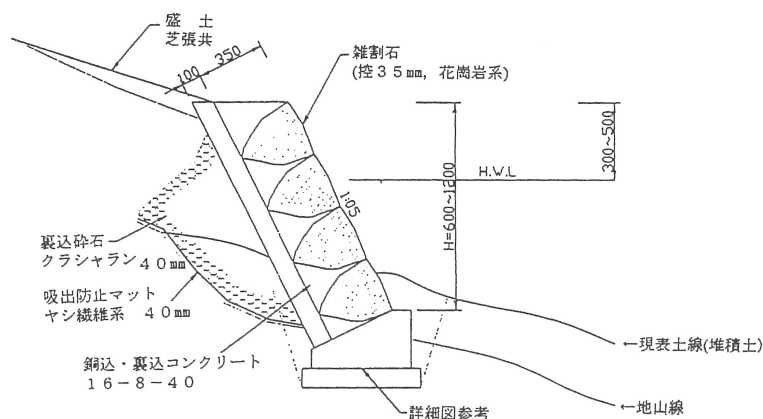


以上の結果を踏まえ、第7図に示した石積みによる護岸工事を平成11年度に実施した。従来、濠をもつ陵墓の護岸工事は景観・環境に配慮して布団籠工法を用いてきたが、本陵の2・3号濠の施工予定箇所は域外からあまり見えず、景観・環境にほとんど配慮しなくてもよいこと、急峻な崖地または急傾斜地であって、



第7図 菅原伏見西陵墳塋護岸設計図(1/40)

一部にかつて地盤が滑落した箇所があること、また既設護岸の石積との取合いをスムーズにする必要があること等の理由から、石積工法を採用した。

浚渫については最小限にとどめた。

(清喜裕二)

倭迹迹日百襲姫命大市墓被害木処理事業(復旧)箇所の調査

はじめに

平成10年9月22日に関西一円を襲った台風7号は、各地に多大な被害をもたらした。特に奈良県下は台風の進路にあたったため、近年にない大災害となった。各陵墓も例外ではなく鳥居、見張所等の構築物をはじめ、山内の樹木に折損、倒木などの被害を受けた。

翌23日に早速各陵墓の被害状況を確認するために巡回を行った。特に被害が甚大であった大和盆地東南部の陵墓を中心に巡視し、大市墓が最も墳丘に被害が及んでいることを確認した。

大市墓はその立地のためか、南側と西側から吹き付けた強風によって、台風前とは外観が一変するほどの被害を受けていた。取り敢えず完全に倒れてしまっている倒木箇所数及び傾くように根起きした箇所数の把握をおこなうとともに、散乱していた遺物の採集と、土層の確認と記録を目的とした調査を9月26、28日と10月3日に実施した。

その後、予算措置などを経て倒木の除去、及び根起き箇所の埋戻し工事は、平成11年3月1日から18日に実施され、その際は監区職員によって遺物の採集などを目的とした立会調査を実施した。以下、大市墓における倒木箇所の土層観察所見と、採集した遺物の概要を報告する。なお、今回の出土品については奈良県立橿原考古学研究所所員寺沢 薫氏より多々ご教示を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

1 倒木根起き箇所の調査

倒木及び根起き箇所は合計29箇所であった(第8図)。被害が多かったのは前方部頂上付近と、後円部円壇付近である。このうち前方部、後円部各1箇所の根起き穴壁面を清掃し、倒木によ

てどの程度墳丘に影響が及んでいるかを確認した。

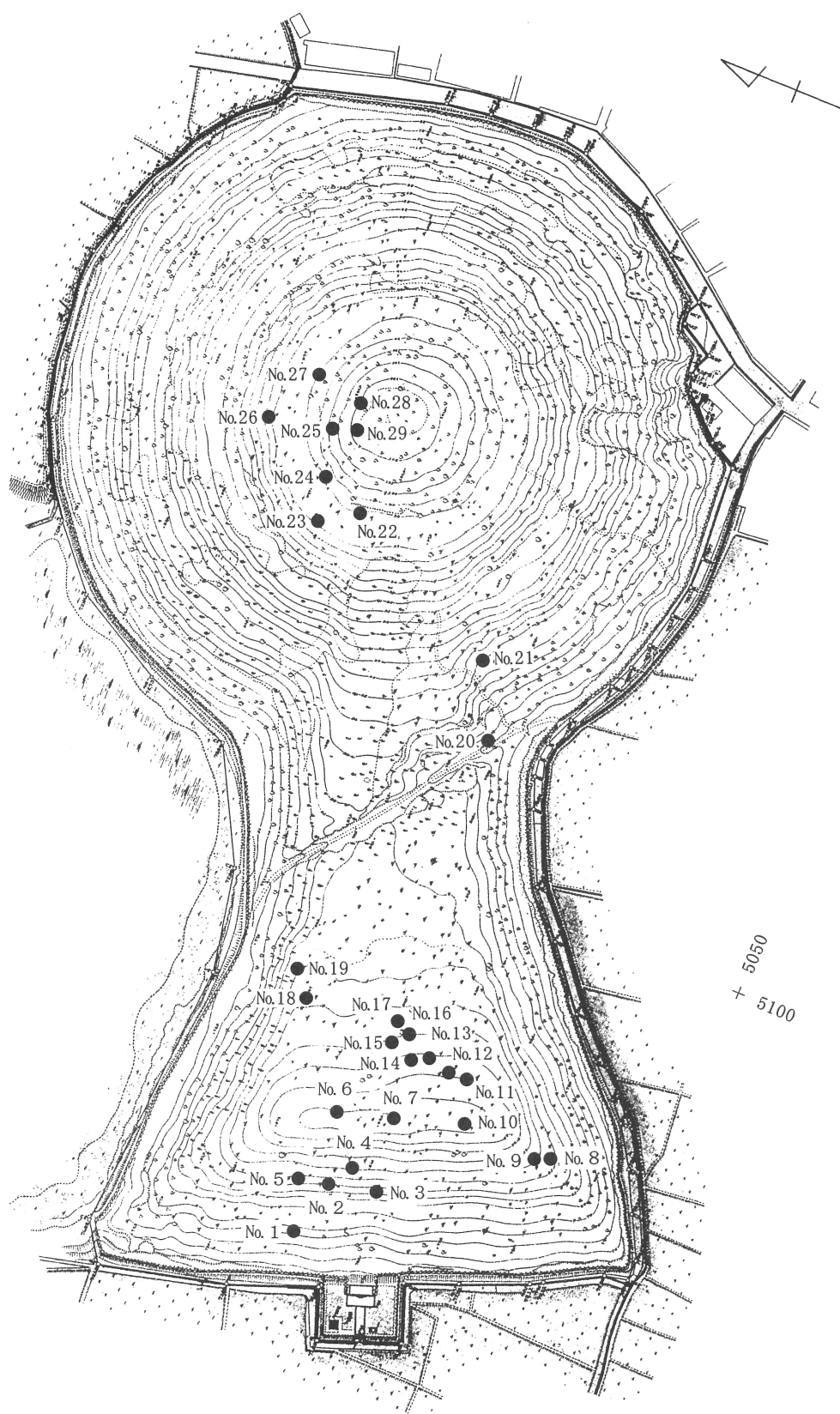
前方部はNo.6の根起き穴を対象とした。No.6は、ほぼ前方部頂上の近くであり、前方後円墳中軸からはやや北に寄った地点である。倒木による穴は長径約5m、短径2m強、深さ約1mに及ぶものである(図版5-1)。この穴の西側3m程度の壁面を清掃し、土層断面図を作成した(第9図)。

土層は大きく3層に分けられる。上層は、厚さ20cm前後の腐植土が堆積し、表土(I)となっている。その下には、多量の礫を含む層が観察された(II)。この礫は拳大から最大長径20cm程度の川原石であり、木根の影響によりまばらになっているところもあるが、概ね標高87.5mのところで列状に並んでいると判断した。後述する遺物は主にII層から出土し、この礫石に絡むように出土する。この地点は前方部の最高所に近く、付近から石が転落して堆積する状況にないことから、この石は墳丘築造当初の原位置をほぼ保っているものと考えられる。断面による観察であり、礫の平面的な拡がり把握できていないが、墳丘表面は礫敷であった可能性が高く、その上に二重口縁壺形埴輪等を置いていた状況が復元できよう。

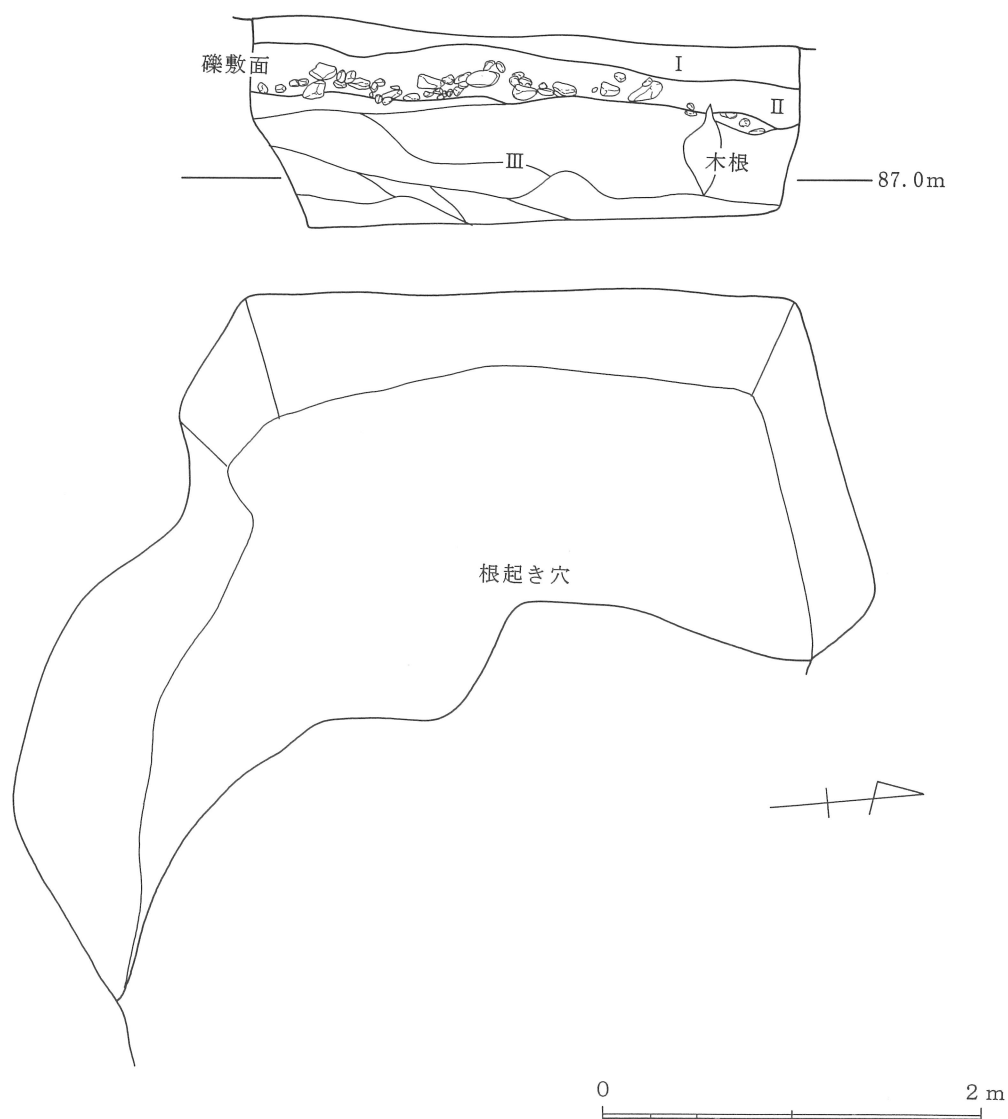
この下70cm程は、基本的に同一の茶褐色砂質土である。木根によって攪乱されていない部分はかなり締まった土層となっており、墳丘盛土(III)と考えている。よって、遺物は基本的に含まない土層であり、礫も含まない。しかし、他の根起き箇所から採集されている遺物の中には、明らかに本墓造営以前に遡る土器が含まれていることから、墳丘盛土には付近の土砂に含まれていた土器が混在しているものと思われる。このIII層は細分層が可能であり、途中で粘質の強い土層が認められる。図に示したように、盛土は南から北にかけての傾斜が観察され、墳丘の中軸から墳端にかけて、盛土をおこなった可能性が考えられる。

後円部では、No.24の根起き箇所でも前方部と同様の調査をおこなった。この地点は、円壇と最上段テラスの傾斜変換点近くに当たる。この地点では樹木が円壇に寄りかかるように倒れたため、完全に横倒しにはならず木根が浮き上がったような状況となっていた(図版5-2)。後円部では、根起き穴の表面に拳大の礫が多数認められる箇所が多く、前方部とはやや異なった状況を呈していた。そのためこの礫層の性格を知るために、根が浮き上がった約2m四方の中に長さ約1m、幅50cmほどのトレンチを設けて発掘した(第10図)。

その土層断面の観察から、大きく3層に分層できた。表面から20cmほどは黒色の腐植土であり、表土(I)であるが、この層にも拳大の円礫が含まれている。その下に厚さ30cmほどの茶褐色土が観察され(II)、この層に遺物が含まれる。この層はスコップが入らないほど多数の礫が堆積し、最大長径20cm程度の川原石が含まれる。また、板状の石も少なからず含まれ、川原石7割に対し、3割程度はこの板状の石が含まれている。特に混入の状況に違いはなく、円礫も板石も混在した状況にある。礫の出土状況は、すくなくとも前方部のような列をなす状況は観察されない。よってこの礫が築造当初のものか、円壇から崩落したものかを判断するのは難しい。この下の茶褐色砂質土は、堅く締まった土層であり、墳丘の盛土と考えている(III)。この土層には礫は全くといってよいほど含まれていないため、II層に含まれている石がこの盛土の上面を覆っていた可能性もある。結論としては第4段テラスが礫敷であったか否かは不明であるが、円壇には



第 8 図 大市墓根起き箇所位置図 (1/1500)



第9図 大市墓根起き箇所平面図および断面図 (No. 6) (1/40)

かなり多くの礫が積み上げられていたものと考えられる。さらにいえば、円壇斜面はいわゆる葺石ではなく、積石状に石が用いられていた可能性もあろう。

後円部には先述したように、各根起き箇所とも拳大の礫が観察され、円壇全体がこのような積石状を呈していた可能性がある。この積石が数十cmの厚さがあるために、樹木の根が深く墳丘に根を張ることができず、今回のように地表面がめくれあがるように根起きしたものと思われる。

大市墓の墳丘上に板状の石が存在していることは既に知られているし、またその岩石学的な報告は本誌第42号に記載してある⁽¹⁾。北側に接する大池の水際でも同様な石材が採集される。これらの石については、これまで石室、もしくは裏込めの石材の可能性も指摘されてきた。しかし今回の調査によって前方部でもわずかであるが板状の石が認められたことから、石室の石材のみとは判断し難く、墳丘上に多数見られる川原石と同様の性格である可能性も考慮する必要があるだろう。

(徳田 誠志)

2 出土品

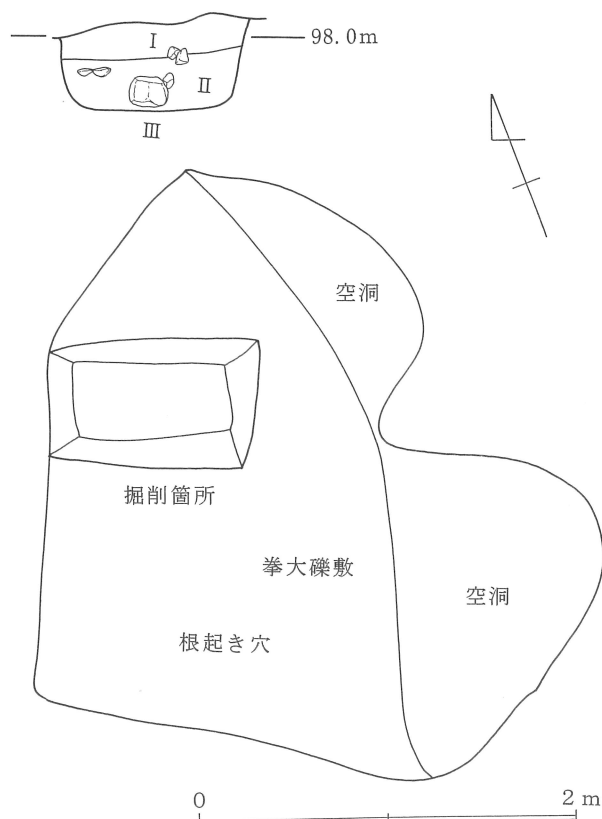
今回、29箇所の根起きした樹根部にくわえられた、特殊器台・特殊器台形埴輪・特殊壺・壺形埴輪等が採集された(第8図)。すべて破片資料で、異なる根起き箇所の破片が接合したものもあるなど、今回採集されたものの中に、原位置を確認できるものはなかった。

本墓出土の資料については、既に本誌27号で紹介がなされている⁽²⁾。その中で、出土位置の傾向が述べられているが、今回の採集資料についても同様な傾向を指摘できる。後円部に特殊器台形埴輪、前方部に壺形埴輪が区別して配列されていたことを示すと理解できよう。

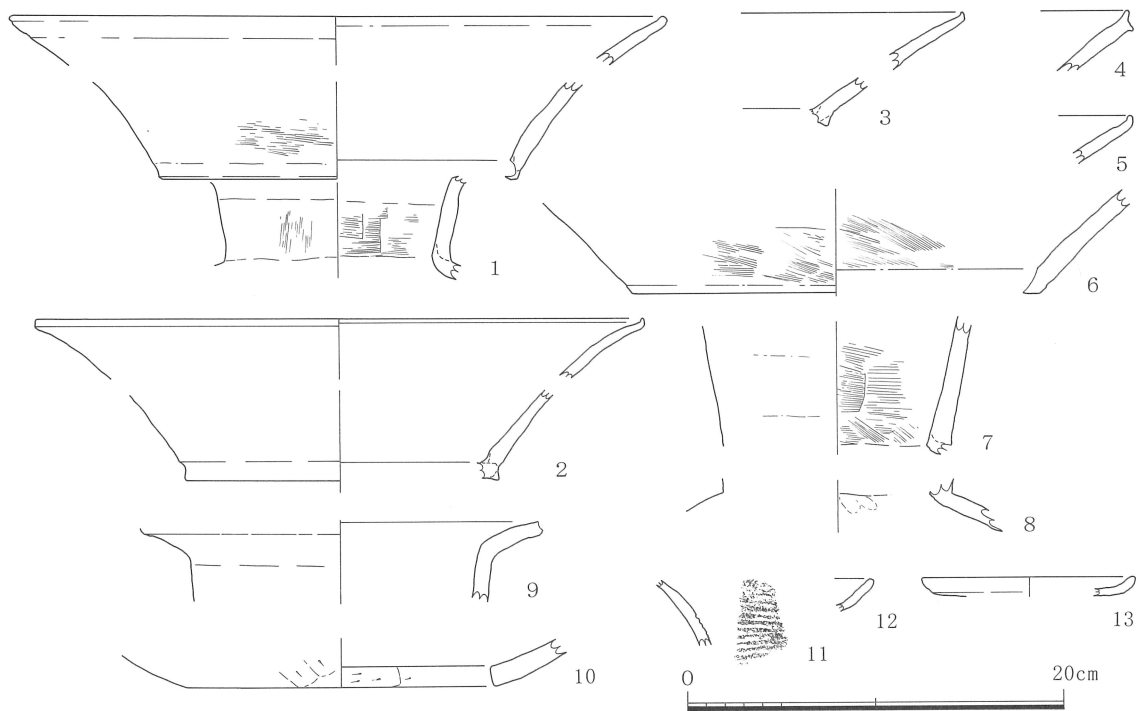
以下、出土地点ごとの傾向と出土品について述べていきたい。図示し得ない破片も多いため、全ての根起き箇所からの出土品は掲載できなかった。また、二重口縁壺形埴輪については、二重口縁壺の可能性は否定できないものの、確実に壺の底部と特定できる破片が見受けられないことから、記述の上では二重口縁壺形埴輪と統一しておく。

根起きNo.6の出土品(第11図) 二重口縁壺形埴輪の破片が中心となっている。1は、同一個体と判断される口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部は緩やかに外反し、端部は僅かに上方へつまみ上げるものの、丸く仕上げられている。調整は内外面ともハケメで、頸部内面は工具の圧痕が残っている。これは、7においても認められる。口縁端部の残る1～5を見ると、1・5は口縁端部を上につまみ上げながらも丸く、比較的明瞭につまみ上げている2～4とは区別できる。9は、頸部の破片であるが、屈曲が比較的緩やかな点が特徴である。10は底部の破片である。11～13は土師器片で、11は埴丘盛土内に含まれていたもの、12・13は後世の混入品と考えられる。

根起きNo.11の出土品(第12・13図) 二重口縁壺形埴輪の口縁～頸部の破片を示した。14は、今回の出土品の中では著しく大きく、胴部最大径は推定60cmを超えと思われる。器壁も厚く、直立に近く立ち上がる口縁部や、斜め下方に強く突出した垂下帯などが特徴である。大市墓で従来知られている二重口縁壺形埴輪などの範疇で捉えることにはやや躊躇する資料である。15・16は、同一個体であるが接合はしない。口縁端部は丸く仕上げられ、外面にはやや粗いハケメが施されており、14と同様、他の二重口縁の破片とは違った印象を受ける。以下、17～41までは従来知られているものと同様の特徴を持つものと思われるが、20・21・32のように、口縁部がかなり



第10図 大市墓根起き箇所平面図
および断面図(No. 24) (1/40)

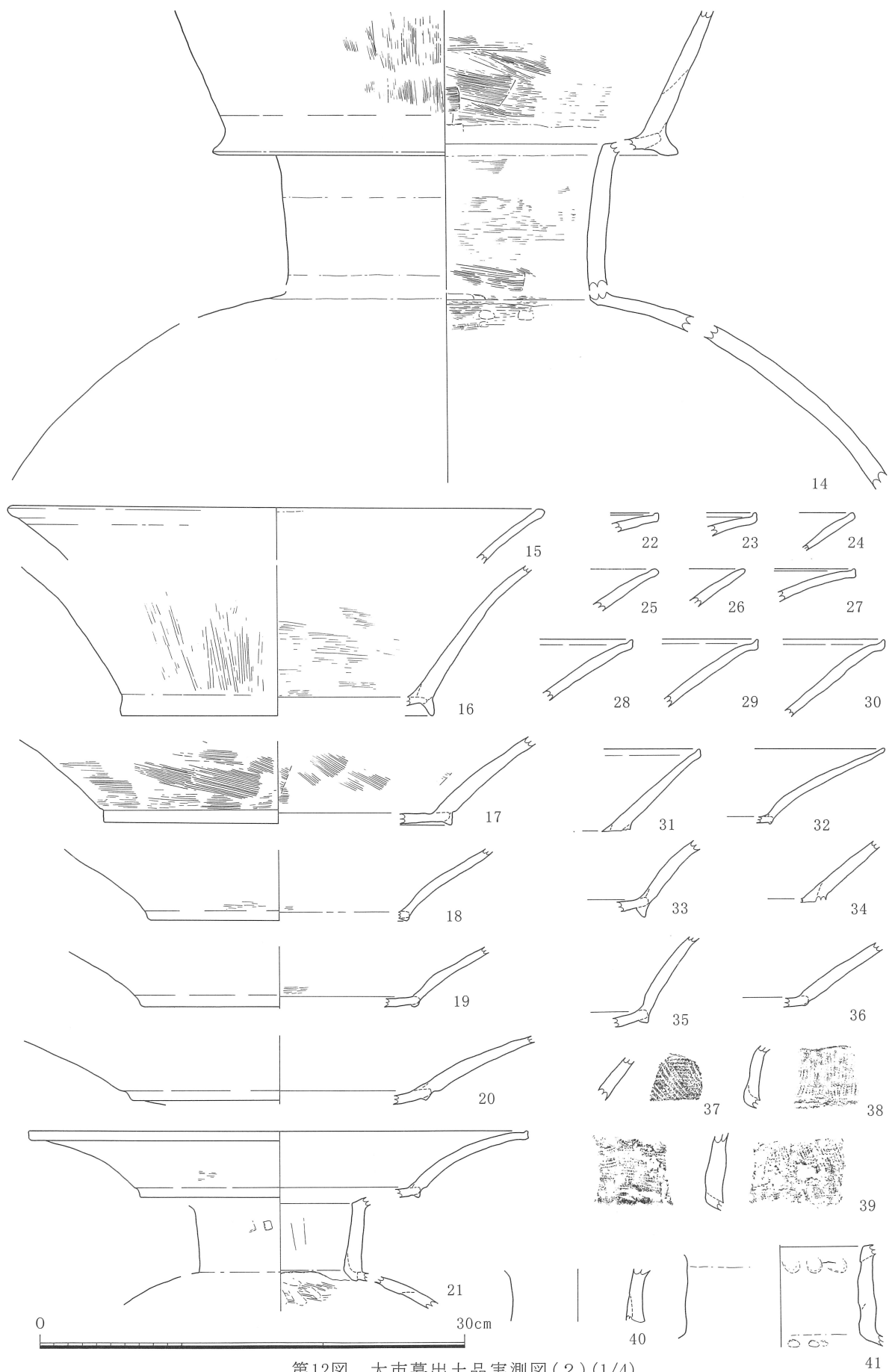


第11図 大市墓出土品実測図(1)(1/4)

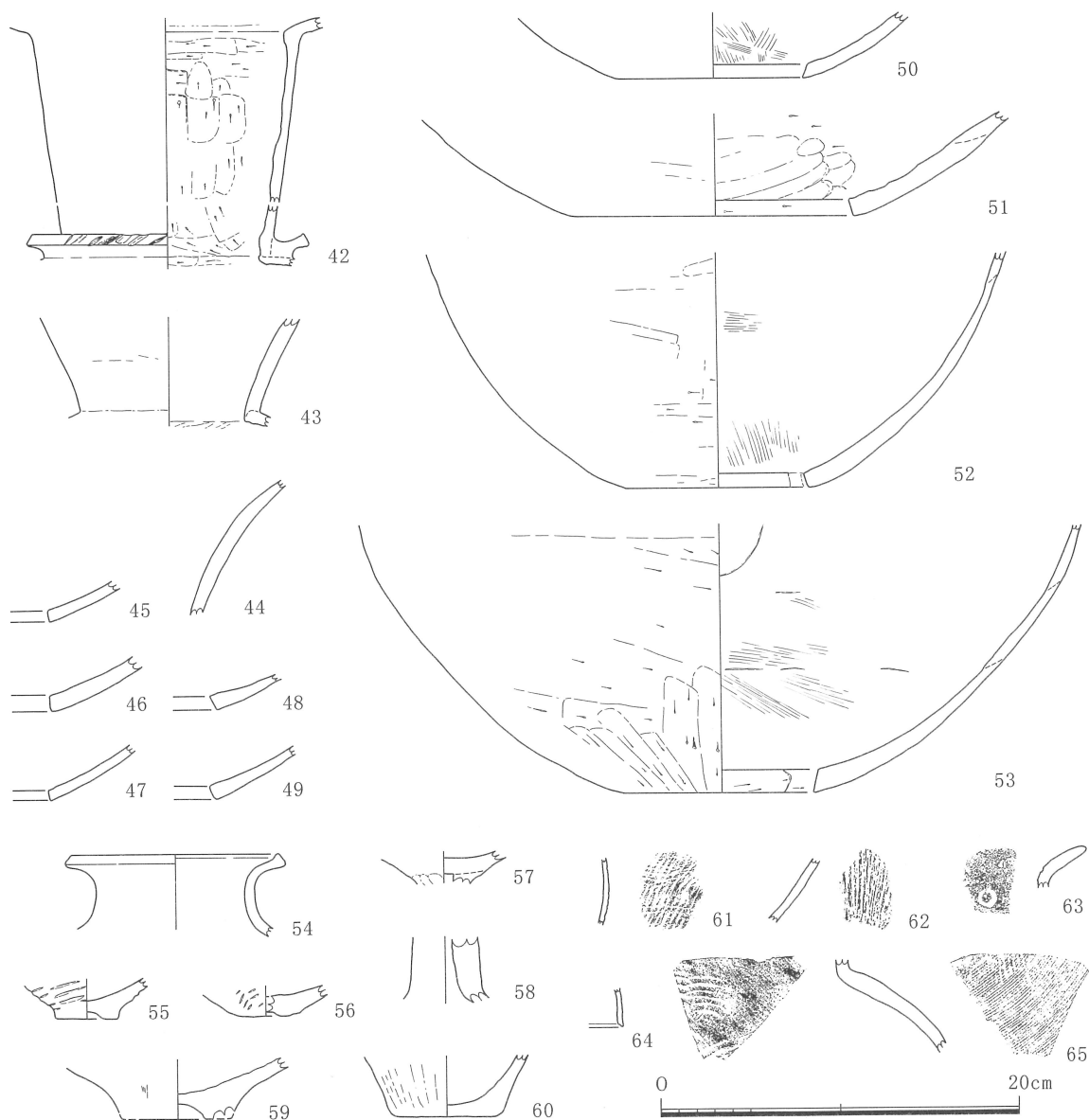
倒れる個体も見受けられる。調整は、ハケメが中心で、頸部内面に41のようにナデを施すものもある。17(図版5-3)には明瞭な赤彩が認められる。

42以下は二重口縁壺形埴輪の胴部～底部の破片とその他の土器類を示した。43は、頸部の破片であるが、二重口縁ではない可能性も残される。44も頸部と考えた場合、43と同様の可能性がある。45～53は二重口縁壺形埴輪の底部破片で、全て焼成前穿孔である。調整は外面が板ナデ・ケズリ、内面は指ナデ・ハケメが確認できる。54～63は埴丘盛土内に含まれていた可能性の高い土師器で、60は弥生土器であろう。64・65は須恵器で、64は蓋、65は壺の肩部である。これらの他に、42(図版5-4)に示した壺の頸部が出土している。直線的に立ち上がる頸部と肩部の接合部には高い突帯が巡り、その端面にはやや疎らに刻みが施されている。口縁部は屈曲したところで欠損しているため、端部の形態は不明である。調整は外面が摩滅で不明瞭ながらナデと考えられ、内面は頸部上端・下端が横方向、全体的には縦方向のケズリが施されている。このケズリは、比較的細かい単位で強く施されており、器壁も部分的に著しく薄くなっている。また、外面には赤彩が施されている。14と42は、従来大市墓では確認されていなかったものであり、形態や製作技術の特徴から、瀬戸内海沿岸地域に系譜が求められる資料ではないかと思われる。

根起き№12の出土品(第14図) 根起き№11と№12は極めて近接しており、ほぼ同一箇所と言える。66・68～70が二重口縁壺形埴輪の破片である。66は今回確認できた二重口縁壺形埴輪の中では、ほぼ全形を知り得る唯一の資料である。胴部はやや上下に潰れた楕円形を呈し、最大径は中央からやや下位にある。頸部はやや広がりながら直線的に立ち上がる。口縁部は端部付近を除き欠損しているため、具体的な形状は不明だが、緩やかに外反していたと考えられる。端部は僅かに内湾しながらつまみ上げ、丸く処理されている。調整は、一部摩滅で不明であるが、内外面ともハケメである。また、底部成形時の乾燥単位が明瞭に認められ、接合痕として残っている。



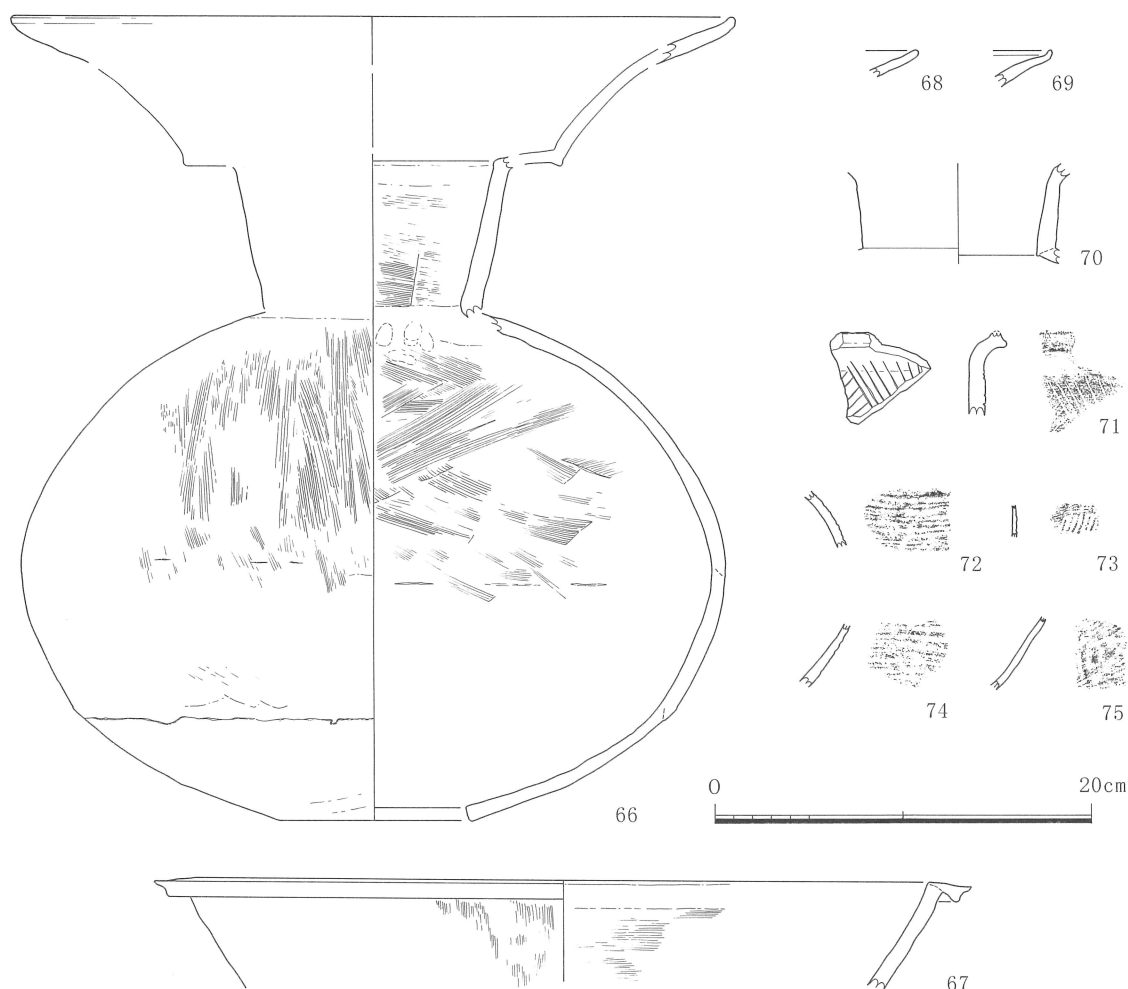
第12図 大市墓出土品実測図(2)(1/4)



第13図 大市墓出土品実測図(3)(1/4)

67は、器種不明の破片である。ごく緩やかに内湾して立ち上がる口縁部の先端が鋭く屈曲し、さらに屈曲部上面にケズリが施され、最終的にナデにより仕上げているようである。その他の部分の調整は、確認できる限りでは、ハケメである。この資料については、壺の可能性が高いものの、内湾する口縁部の特徴などから考えて、器台としての機能を有していた可能性も指摘しておきたい。67の上に66の壺形埴輪が載っていたような状況を考える余地もあろう。71は、端部が屈曲する口縁部に斜線文を施した、壺か器台の可能性が考えられる。以前、同様の破片が前方部で1点採集されているが、混入品かと疑われていた。67と71はあくまで可能性の範囲に止まるものの、宮山型特殊器台や特殊器台形埴輪とは異なる、ある種変容された姿で使用された器台(器台形埴輪)という見方もできるかもしれない。72～75は埴丘盛土内に混入していた土師器である。

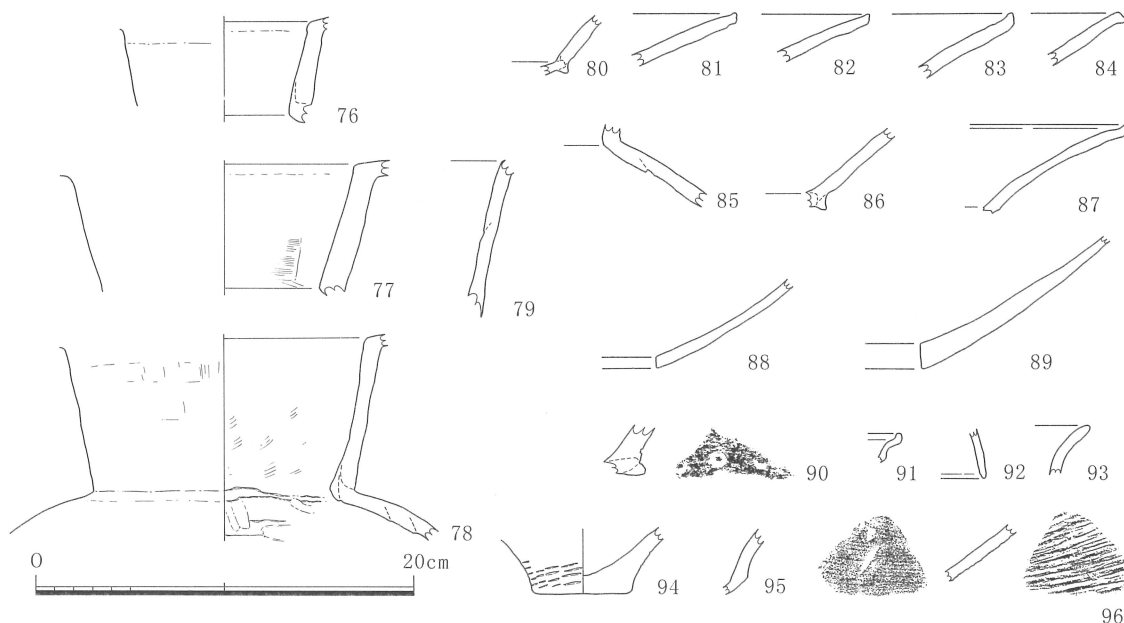
根起きNo13・14・15の出土品(第15図) 76～90までは根起きNo14の出土で、76～89は全て二重口縁壺形埴輪の破片である。これまで述べてきたものと、同様の特徴を有している。78がもっ



第14図 大市墓出土品実測図(4)(1/4)

とも大きな破片であるが、直線的に立ち上がる頸部と肩の一部が残存している。外面はハケメの後、ナデ調整が施され、内面は頸部と肩部の接合部はナデ調整が顕著であり、頸部はハケメである。90は竹管文のある二重口縁壺の口縁部である。墳丘盛土への混入品であろう。91～93は根起きNo13出土で、91・93は土師器、92は須恵器である。94～96は根起きNo15出土の土師器である。91～96も92を除き、墳丘盛土への混入品であろう。

後円部根起きNo24からの出土品(第16図・図版5—6) 97～111・115は、特殊器台形埴輪の破片である。97(図版5—5)は突帯を挟んで、蕨手文と斜線文の文様帯と、2条の縦沈線で分けられた区画内を交互に傾きを違えた斜線で充填する綾杉文状の文様帯が認められる。内面のケズリが非常に顕著である。98～102は同一個体の破片である。外面はタテハケの後、横方向の指ナデを施し、内面は摩滅のため不明瞭だが指ナデと思われ、一部ハケメも残る。図示した文様帯の上下は無文帯である。外面は赤彩が認められる。103は摩滅のため文様は明らかではないが、三角形透孔の一辺が認められる。97と同様内面のケズリが非常に顕著である。104～107・109も都月型の文様をもつ胴部破片である。108・110は斜線文のように見えるが、施文工具も異なり複合鋸歯文と考えられる。111・115は口縁部付近の破片と想定される。112～114・116・117は特殊壺の破片である、112は口縁部で、外面に複合鋸歯文が線刻されている。113・114も口縁部～頸部



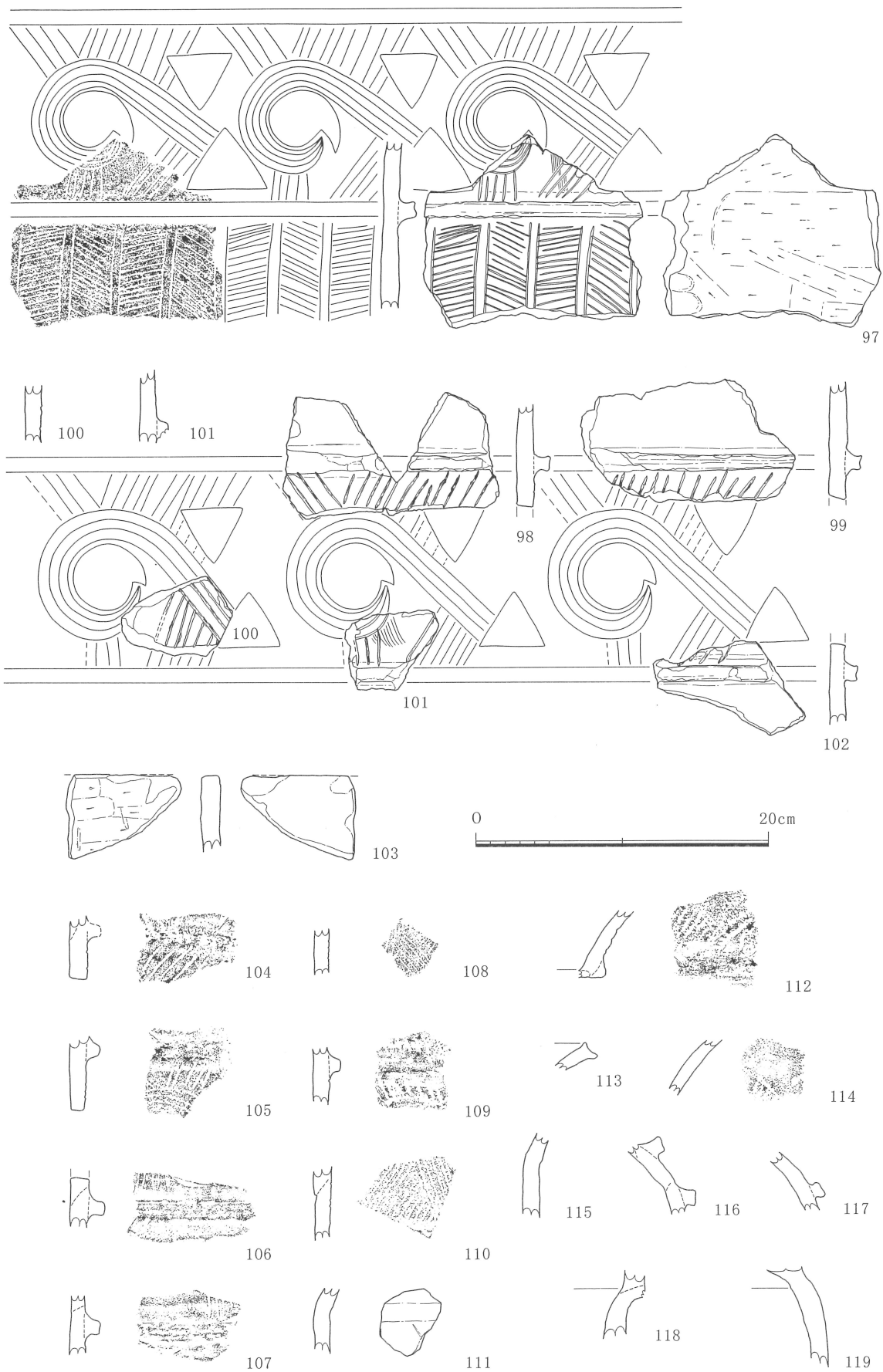
第15図 大市墓出土品実測図(5)(1/4)

にかけての破片である。116・117は胴部の突帯付近の破片である。118・119は、後述するが、宮山型特殊器台の口縁部と底部の破片と考えられる。

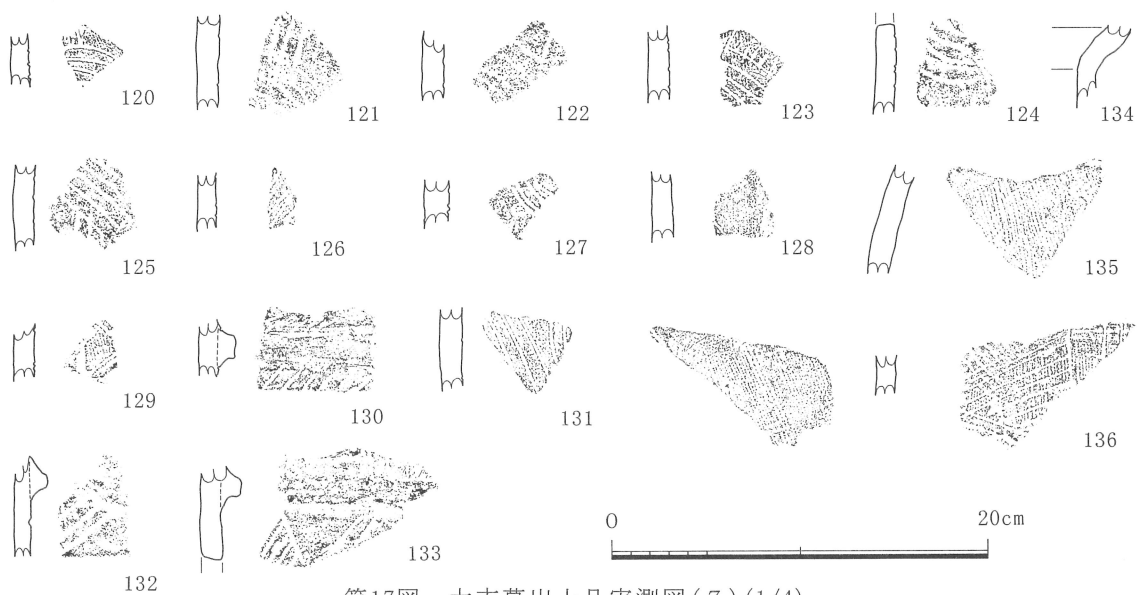
根起きNo25の出土品(第17図) 根起きNo24と同様の特徴を備えた破片が多い。120～132は特殊器台形埴輪の蕨手文と斜線文の文様帯を構成する破片である。133は、120～132に類すると思われるが、複合鋸歯文であり、異なる文様構成の可能性がある。134は口縁部付近の破片である。135はハケメ調整のみが確認でき、位置の特定ができない。136は本来無文帯であった段に、縦に分けられた区画に複合鋸歯文を充填した文様を施している。内面のハケメが顕著である。これら第16・17図に示した都月型の文様は、微細な点は異なるものの、従来知られているものと同じといえる。

根起きNo26の出土品(第18図) 138は特殊壺の胴部破片である。突帯上位に非常に細い線刻を確認できる。137は特殊器台または特殊器台形埴輪の口縁部破片である。139は、宮山型特殊器台の底部屈曲箇所破片と思われる。140～147(図版5～7)は宮山型特殊器台の胴部破片である。特殊器台形埴輪の胎土とは明らかに異なり、色調も赤褐色を呈する。出土箇所が同じであることから、これらの破片は同一個体のものと思われる。根起きNo24でも、宮山型特殊器台の口縁部と底部の破片が認められたが、破片数から判断する限りは、個体数は特殊器台形埴輪に比べると少ないものと考えられる。外面はタテハケの後ナデ調整で器面を整え、その後線刻を施しており、内面はケズリである。146は、内面ナデ調整であり、その点が他の破片と異なる。線刻と透孔の関係は、147の切り合いを観察する限り、線刻の後に穿孔したと考えられる。

これらの破片を基に文様を復元したのが148である。もとより小破片のため、これをもって文様の細部まで明らかにすることは不可能である。ここでは、同じ大和で宮山型特殊器台を出土している、弁天塚古墳の文様に当てはめてみた。その結果、両者の文様は類似している可能性が高いことを指摘できる。透孔の細かい形状やS字文の間の斜線の位置や本数など、明らかにし得ない点もあるが、およその文様構成は把握できよう。



第16図 大市墓出土品実測図(6)(1/4)



第17図 大市墓出土品実測図(7)(1/4)

また、復元図では便宜上全ての破片を同じ段として配置しているが、内面調整にケズリとナデの2者が認められることから、両者は本来異なる段の破片になると考えられる。

根起き箇所が特定できない出土品(第19図) 149～151は特殊器台形埴輪の破片と考えられる。149は口縁部付近と思われる。150・151は共に、突帯を挟んで上下に文様帯を確認できる。155は縦横に線刻が施されているが、全体の構成は不明である。特殊器台である可能性も考えられる。

(清喜裕二)

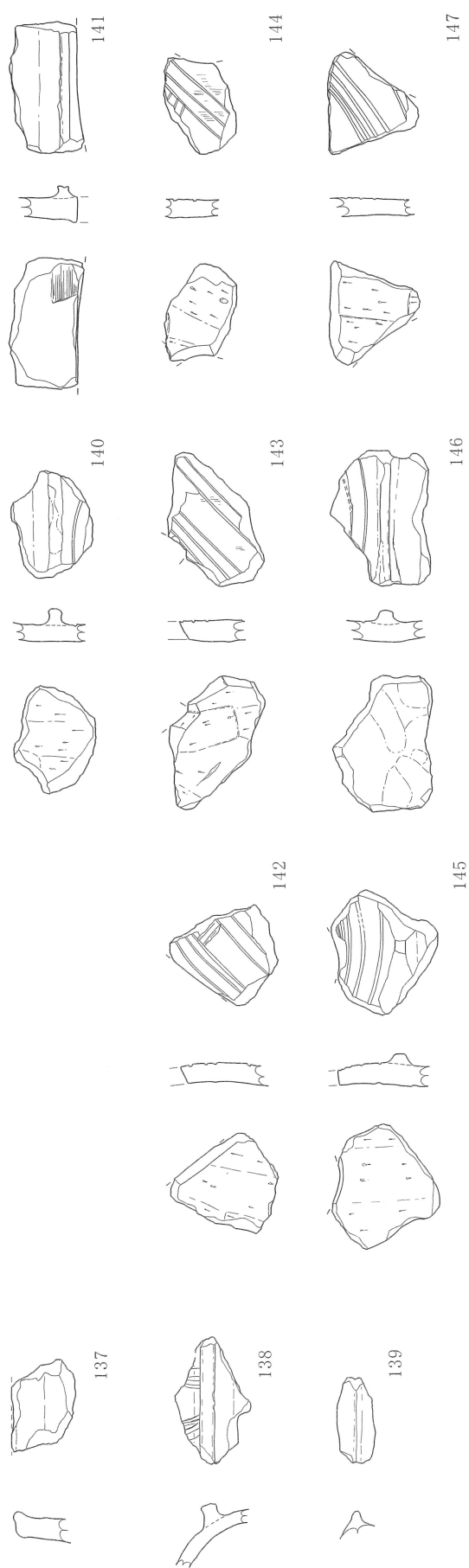
まとめ

今回の大市墓の調査は、台風とその災害復旧に起因する。そのため考古学的な所見については制約も多い。土層断面の観察においても、墳丘主軸に直行もしくは平行に設けたトレンチではなく、礫敷きについても平面的な観察はなし得ていない。同様に遺物も原位置を保って出土したものはなく、すべて根起き箇所、及び倒木の根に付着した土砂の中から採集したものである。調査の目的が、風倒木が墳丘に与えた影響を確認するものであり、墳丘の構造を知るためのものではないことから当然であろう。今回得られた所見が、大市墓を理解する上でわずかでも有用であれば、不幸中の幸いであるかも知れない。

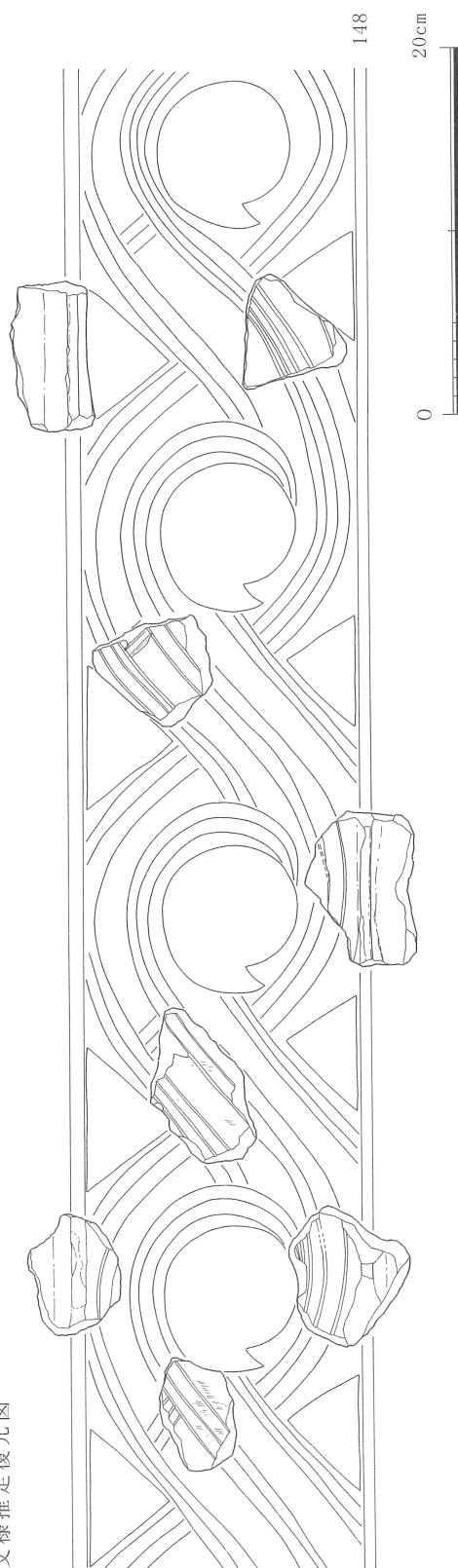
しかしながら、今回の台風による倒木が墳丘を、かなり痛めたことは事実である。何十年に一度のこと、また天災によるものではあるが、陵墓の保全・管理の難しさを改めて浮彫りにした。今回の根起き箇所については、根に近い幹部分で伐採し自然に戻るものは戻し、またウィンチとワイヤーで引き戻したものもある。戻らないものについては、根についた土砂を掻き落として穴を埋め戻す工事をおこなった。そのほか、折損した樹木、枝の片付けを実施した。また、今回失われた樹木の後継樹は新たに植栽することはせず、自然の実生が成育するのを待つこととしている。

また、今回根起き箇所から採集した遺物については、小破片が多かったものの、できる限り復元して掲載した⁽³⁾。この遺物については、次のようにまとめておきたい。

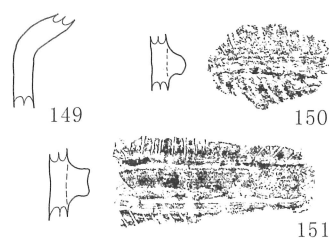
第18図 大市墓出土品実測図(8)(1/4)



宮山型文様推定復元図

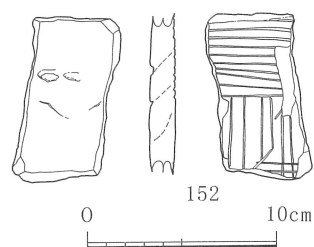


(1) 出土品の集中する箇所と、疎らな箇所に、截然と区別できることを指摘し得る。後円部墳頂平坦面と、前方部墳頂平坦面最高所付近への集中が、特に著しい。この2箇所以外に、現在のところ埴輪・土器の配列を想定させる箇所は確認できない。



(2) 後円部には特殊壺・特殊器台・特殊器台形埴輪が配列され、前方部には二重口縁壺形埴輪が配列されていたことが、より明確になった。

(3) 後円部墳頂においては、従来知られていたいわゆる都月型特殊器台形埴輪に加え、宮山型特殊器台の存在を確認した。その文様構成は、同じ大和において既に知られている、弁天塚古墳出土の宮山型特殊器台のそれに類似するものと推定される⁽⁴⁾。



第19図 大市墓出土品
実測図(9)(1/4)

(4) 前方部墳頂においては、従来知られていた二重口縁壺形埴輪の他に、瀬戸内海沿岸地域に系譜を辿ることができると思われる、複数の土器を新たに確認した(第12図14、第13図42)。

(5) 特殊器台や二重口縁壺形埴輪などの築造時に伴うもの以外の土器類に関しては、時期の下るものについては、何らかの理由で後世持ち込まれたものと思われる。遡るか、あるいは近い時期の可能性のあるものは、墳丘盛土内への混入品の可能性が高い。その理由として、特殊器台や二重口縁壺形埴輪などは、接合関係はなくとも、同一個体と考えられる破片が確認できる例が多いのに対し、それ以外の土器類はいずれも細片であり、同一個体と判断できる破片が認められないことなどによる。

以上、今回の大市墓の調査概要を述べてきた。今回の被害は大市墓に限ったものではなく、各陵墓でも倒木によって少なからず墳丘に影響を与えている。このような被害を防ぐためには樹木を一切撤去する方法も考えられる。しかし、特に市街地にある陵墓では、周濠と墳丘の緑が良好な景観を作り出していることも事実であり、すべてを伐採することには抵抗も大きいであろう。

今回の被害を教訓として、樹木の伸長を抑制するための除間伐・芯止・中切り、あるいは喬木以外の樹種の選定などを検討している。その一環として、笹で墳丘を覆うなどの措置を試行している。

(徳田誠志・清喜裕二)

註

(1) 加藤 昭 「河内大塚陵墓参考地所在ごぼ石、大市墓および衾田陵採集「葺石」の岩石学的記載」『書陵部紀要』第42号 平成3年2月

(2) 中村一郎・笠野毅「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号 昭和51年2月

(3) 今回の出土品に関する実測等の整理にあたっては、加藤一郎氏(早稲田大学大学院)の多大な協力をいただいた。

(4) 宇垣匡雅は宮山型とは別に弁天塚型を設定しているが、本稿では宮山型という表現で統一した。

宇垣匡雅「10 特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究』(上) 山陽新聞社 平成4年11月

参考文献

宇垣匡雅「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第27巻第4号

考古学研究会 昭和56年3月

宇垣匡雅「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号 考古学研究会 昭和59年12月

宇垣匡雅「特殊器台形埴輪の文様と編年—古市秀治「特殊器台形埴輪の研究」について—」『考古学研究』

第43巻第4号 考古学研究会 平成9年3月

近藤義郎「第5章 あとがき」『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団 平成7年7月

近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会 昭和42年

高井健司「18 特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社 平成4年11月

高橋 護「組帯文の展開と特殊器台」『研究報告』5 岡山県立博物館 昭和59年3月

田中英夫・奥田 尚「奈良県中山大塚古墳の特殊器台形土器」『古代学研究』109 古代学研究会

昭和60年11月

野々口陽子「いわゆる畿内系二重口壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財

調査研究センター 平成8年3月

春成秀爾「箸墓古墳の再検討 2 箸墓古墳の埴輪」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集 昭和59年1月

古市秀治「特殊器台形埴輪の研究」『考古学研究』第43巻第1号 考古学研究会 平成8年6月

丸山竜平「大津市壺笠山古墳の特殊器台形埴輪について」『究班』 埋蔵文化財研究会 平成4年9月

安康天皇 菅原伏見西陵見張所改築工事箇所の調査

第20代安康天皇の菅原伏見西陵の見張所が経年のため老朽化し、改築工事が計画された。先に掲載した事前調査の期間にあわせて、基礎工事部分(長さ4.0×幅4.0m、深さ0.6m)及び下水管埋設部分(長さ47.8m、幅0.8m、深さ0.3~1.8m)の掘削にあたって立会調査を実施した。

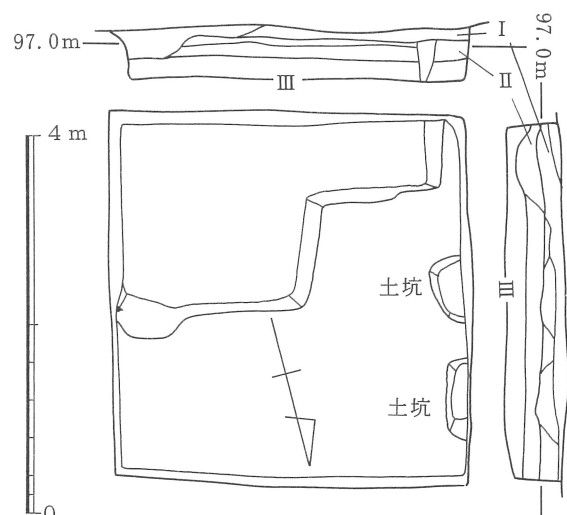
基礎工事に伴う掘削箇所は第1図に示した箇所であり、土層は大きく3層に分けることができる(第20図)。

I層 表土(黒色腐食土)。

II層 赤褐色粘質土の盛土。

III層 黄橙色粘質土の地山。

この土層のうちI層を除去した時点で、土坑状の落込みが掘削箇所西端で検出された。よって



第20図 菅原伏見西陵調査箇所平面図
および断面図(1/40)



1 大市墓根起き箇所No.6 (南から)



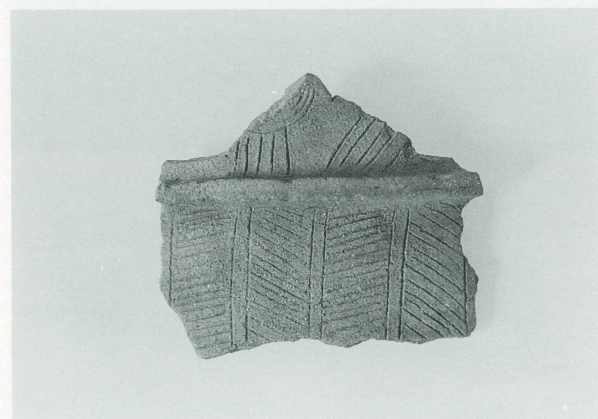
2 大市墓根起き箇所No.24 (西から)



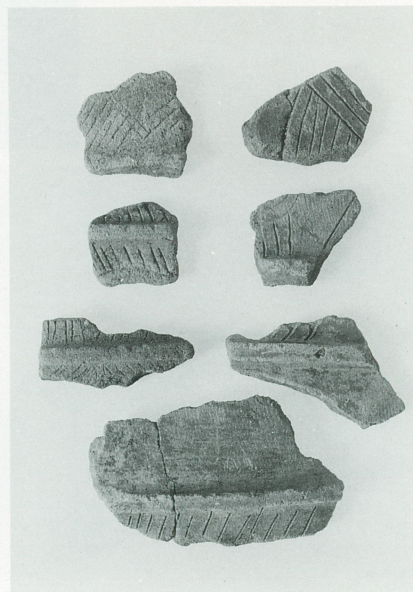
3 大市墓根起き箇所No.11出土品 (第12図17)



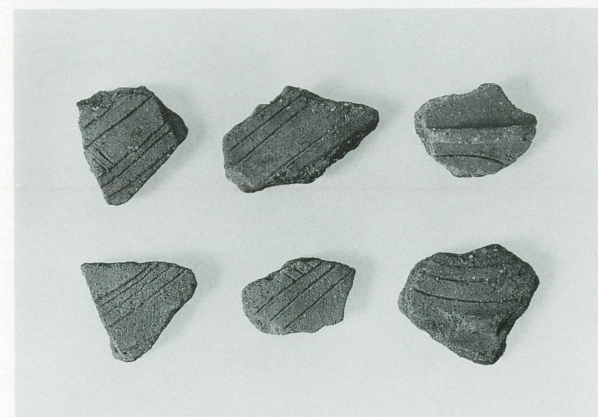
4 大市墓根起き箇所No.11出土品 (第13図42)



5 大市墓根起き箇所No.24出土品 (第16図97)



6 大市墓根起き箇所No.24出土品
(第16図)



7 大市墓根起き箇所No.26出土品 (第18図)